

四季で語る私の留学体験

一橋大学商学部 ウンドラル ビャンブダライ

UNDRAL Byambadalai

1. はじめに

「日本に留学したい。ぜひ、日本の大学に入って、勉強したい。」このような夢を持つようになったのは、新モンゴル高校に入ってからである。新モンゴルという高校は、日本で勉強していた留学生（今の新モンゴル高等学校校長）の日本式高校をモンゴルで作りたいという夢から創立された高等学校である。モンゴルの首都ウランバートルに位置する私の高校は、多くの日本人の支援で設立された。日本の高校と同様に、皆で制服を着、皆でお昼を食べ、皆で学校を掃除する、日本語と日本文化も勉強するモンゴル唯一の日本式高校であった。「医者になりたい」、「将来、国の発展に貢献したい」、「外国に留学したい」といったような様々な夢を持つ高校生が集まった、エネルギー、情熱があふれた環境であった。もし新モンゴル高校に入学していなかったとしたら、今、これを書いていないであろう。日本に留学している先輩方の話を聞き、日本人の先生方に教えてもらう中で、いつしか日本語と日本文化の美しさに惚れ、日本留学を望むようになったのである。

外国に留学するにあたって、ほとんどのモンゴル人学生が直面する問題は経済的問題である。この問題の唯一の救いの手は、日本の文部科学省や様々な財団から得られる奨学金であるが、非常に競争率が高い。そこで、私は、友人たちと共に日本政府（文部科学省）奨学金留学生選考試験と日本留学試験の準備をし始めた。幸運にも、文部科学省の奨学金の試験に受かり、日本に留学することになった。このように、2009年4月に夢が実現し、私は来日したのである。その時から、ちょうど3年が経つ。3年の間に様々な人々に出会い、様々な事を体験し、3年前の私は様々な形で成長し、変わったと思う。世の中は、春から夏、夏から秋、秋から冬、冬から春へと変わり、全ての人々が各々の目でこの様子を見ているであろう。日本にいる留学生もそれぞれの異なる視点で見ているであろうが、私の目を見た日本の四季をここで紹介したいと思う。

2. 新しい希望をもたらす春



一橋大学入学式の後、大学通りにて(2010年4月)

私が来日したのは春であった。あっちこちに桜が咲いた美しい日本が私を歓迎してくれた。日本の春は新しい始まりの象徴であり、春が来るとともに新しい夢と新しい希望が生まれるように思われる。来日して、初めて感動したのは大学のキャンパスを見た瞬間であった。緑に囲まれ、多彩な花に飾られたキレ

イなキャンパス。新しく建設されたビルが鏡のように輝いていたが、それ以上に新しく入学した学生たちの目が炎のように燃え輝いていた。東京外国語大学の新しくてスタイリッシュなキャンパスはいつもフレッシュな気持ちをもたらしてくれていた。来日2年目に入学した一橋大学のキャンパスも感動的であった。西洋式の古い建物を見る度に、建物が建てられた当時の教授方と先輩方の学問に対する熱意が感じられさえる。緑の森、美しい花の匂いと鳥の鳴き声が毎日の生活を自然に近づけてくれる。美しいキャンパスはもちろん、新しい技術で十分過ぎるまでに設備された環境と先生方の偉大さは日本の大学の魅力だと思う。

来日して、初めの頃はホームシックになったり、カルチャーショックを感じたりして困ったことが少なくなかった。その時に支えてくれたのは、東京外国語大学の先生方と友人達、在日モンゴル留学生会のメンバー達であった。在日モンゴル留学生会は日本全国にいるモンゴル人学生を支援することと日本の方々にモンゴル文化を紹介することを目的とした学生団体である。20人弱のメンバーからなるこの団体は、全国のモンゴル人学生を集め、勉強会、スポーツ大会、クリスマスパーティーなどの様々な活動を展開する。さらに、モンゴル文化を紹介する日本最大のイベントとして「ハワリンバヤル」すなわち「春祭り」を5月のゴールデンウィークにおいて開催し、毎年約5万人もの客が訪ねるといふ。日本に来てから、在日モンゴル留学生会のメンバー達にお世話になったり、自分も実施されている活動を手伝ったりしてこの団体と密接に結ばれ、2010年から2011年にかけて留学生会の事務局長も務めていた。半年をかけて、ボランティアの日本人の方々とモンゴル人留学生が計画し、開催する「春祭り」を訪ねてみることを皆さんにもお勧めしたい。

3. 日本の文化を学ぶ夏

桜の花が散ってから、だんだん暑くなり夏が来る。新しい生活に慣れてきた人々は夏が来るにつれて、もっと忙しくなる。7月は、学生たちにとって、期末試験の月であり、図書館に空席が見つからなくなるほど、皆が勉強に励む時期である。7月下旬に試験が行われ、8月からやっと夏休みが始まる。8月と9月は帰国したり、旅行に行ったり、本をいっぱい読んだりして好きなことをやるチャンスが与えられるため毎年楽しみにしているの



ジャパントにてお茶会体験(2009年8月)

である。その頃は、日本文化を紹介し、ホームステイさせる留学生向けのプログラムが数多く実施される。その1つは「ジャパント」である。私は、2009年の夏に第22回ジャパントに参加し、石川県の金沢市と輪島市でホームステイした。その時に出会ったホストファミリーの皆さんとは今でも手紙、メール、フェイスブックなどを通じて困った時に相談したり、嬉しいことがあった時には知らせたりしている。東京では食べることのできない美味しい寿司を食べ、東京を出ない限り分からない日本人の素晴らしい性格が分かり、お茶会をはじめ、そば作り、座禅など様々なことを体

験した、日本人と日本文化がもっと深く理解できた1週間であった。そのプログラムに参加していなかったら、日本人がどれほど親切で、どれほど友情のある国民であるかが分からなかったかもしれない。

4. 皆で力を合わせる秋

蒸し暑い夏が終わり、木の葉が色を変え秋が来る。待っていた冬学期が始まり、また新しい冒険と出会いがやって来る。新学期が始まるにつれ、クラブ、サークルは新しいメンバーを募集する。クラブ・部活動はキレイなキャンパスや偉大な先生と並ぶ



一橋祭 モンゴル料理ブース(2011年11月)

日本の大学のもう1つの魅力だと思う。二つ以上の部活動に参加する学生もいるが、同じ部活動に卒業まで身を置くのが一般的であり、日本の特徴である。このように、4年間、勉強以外のことにも挑戦し、自分を成長させ、友達のネットワークも作るという点で日本のクラブ・部活動は優れていると思う。

11月は各大学において学園祭が行われる。その時に、全てのサークル、部は1年間学んだことを人々に見せたり、ブースを借りて焼きそばを売ったりし、3日間を楽しく過ごす。「このような祭り

りがモンゴルでもあったらいいな」といつも思う。というのは、3日間の祭りに向けて皆で準備し、3日間同一の目標の下に頑張り、祭りが終わったら皆で片付けをすることでお互いのことがよりよくわかるようになり、より強く団結できるチャンスが与えられるからである。毎年行われる学園祭の料理にモンゴル料理も加えたくて、2009年から、モンゴル人留学生が力を合わせてモンゴル料理のブースを出し始めた。利益全額をモンゴルに送り、子供たちのために寄付できたことを大変嬉しく思っている。

5. 印象に残る冬

だんだん寒くなり、たまに雪が降るのは冬の季節である。12月にクリスマスが近づくと、あっちこちにイルミネーションが光り、街がもっと美しくなる。12月下旬になったら忘年会が続き、お正月の後に新年会が始まる。お正月の時、友人と家族に年賀状を送る日本の伝統がある。お世話になった人のことを忘れず、感謝をちゃんと伝えるのが日本人の素晴らしさではないかと思う。お正月が終わると、学生たちがまた忙しくなる。2月上旬に期末試験があるからである。期末試験が過ぎると春休みがやって来て、またやりたいことができる時間が与えられるのである。

日本で過ごした冬の中でも2011年の冬は特に印象的であった。GCMP(Global Change Makers Program)というプログラムに参加し、様々な大学の日本人学生や社会人と一緒に、バングラデシュに行った冬である。チームに分かれ、教育と環境の問題について現地で調査を行い、自分たちで解決方法を探り、提案するというプログラムであっ

た。渡航する前の事前準備、現地での活動、渡航した後の事後報告を含め2～3カ月くらい付き合い合ったチームのメンバーたちから多くのことを学んだ。まず、日本人の学生たちはチームワークが上手であった。ミーリングリストでメールを回したら皆ちゃんと返信したり、お互いの話をよく聞いたりする。次に、ほとんどの日本人学生はしっかりしている。渡航する以前に、バングラデシュについての書籍をいっぱい読んだり、現地で必要となるものを全部書いてから準備したりしていた。最後に、ほとんどの日本人学生は始めた仕事をちゃんと最後までやり通す。バングラデシュから戻ってきても、日本で会議を行い、次の参加者のために報告書も書いた。日本人学生と力を合わせた初めての体験であったが、大変勉強になった。



バングラデシュの村でチームの日本人学生とバングラデシュの子供たちと共に
(2011年1月)

6. おわりに

夢の国である日本に来てからもう3年が経つ。3年の間に多くのことを新しく体験し、多くの人々に新しく出会った。一橋大学商学部に所属し、多くの素晴らしい先生方に経済学をはじめ、金融、会計、経営などの授業を教えてもらっている。これから2年間大学の勉強を頑張り、日本の社会にも出てみたいと思う。将来、モンゴルの財務省で勤め、国の発展に貢献したいと思っているのでその目標のためにも、これまでの体験を生かしながら、有意義な毎日を送りたい。これから日本でどのような冒険が待っているのか楽しみである。